あとがき

環境科学年報２８号を何とかだせた。この発行は、前号と同じに、１昨年度から継続していた信州大学の学長裁量経費の科学研究費の諏訪湖天竜プロジェクトの報告と合わせて、年報として継続して印刷することになった。信州大学は、環境マインドを育てる方向を打ち出した。大学として環境教育に力を入れようと考えている。２１世紀への持続可能の社会をつくるために、信州の環境、日本の環境、世界の環境を守らないといけない。自然環境豊かな環境の中にある信州大学は、日本をリードし、世界をリードするという気迫を見せたい。信州大学環境科学研究会の仲間が、実行力を発揮し、このマインドを育てる中心になってもらいたい。

信州大学、信州というイメージの一つに諏訪湖がある。その諏訪湖が富栄養化し、過栄養化し、水質汚濁の代表といわれるようになった。この対策、水質汚濁の研究に信州大学の仲間が研究をした。昨（2005）年10月には、諏訪天竜プロジェクトの仲間が中心になり、信州大学山岳科学総合研究所編（沖野外輝夫・花里孝幸編 ）、信濃毎日新聞社から「アオコが消えた諏訪湖　人と生き物のドラマ」本を出版した。諏訪湖の歴史と水質の変化（環境の変遷と研究の歴史、水質の変遷、流入、流出河川とその影響、諏訪湖の浄化対策と評価（「汚濁への挑戦」から下水道の建設へ、浚渫の功罪、沿岸の修復事業―ミチゲーション、変わりつつある諏訪湖の生態系（アオコの消長と毒素、増え始めた水草）などについて書かれてある。

編集世話の一人の中本も信州大学で、過去の素晴らしい技術の誤解、現代に通用する技術にするにはどうしたら良いかを研究し、その成果として、2005年の愛知万博で「愛・地球賞」をもらうことができた。２１世紀への持続可能の技術として「藻の繁殖に注目した緩速ろ過技術」が評価された。また、フジテレビ系の全国ネットで「不思議な水1000年の旅」として75分番組のこの技術の紹介もされた。この技術を皆に伝えるために、昨年８月には、「おいしい水のつくり方（築地書館）」も出版した。この技術は、現在、バングラデッシュでは安全な飲み水確保のために、プロジェクトが発展してきている。

信州大学では出前講座もし、社会貢献をし、大学教員の知識や知恵を伝えようとしている。仲間は、それぞれ、素晴らしい研究をし、学生を教育しているが、まだ、皆に実感として伝わっていない。

環境問題の原因は、人類が無責任に大量の廃棄物をつくり廃棄し、自然の浄化力以上の負荷を自然界に与えてしまったことによる。使い捨ての目先の技術ではなく、長い目で考えて対策をとる必要がある。長野県は自然環境豊な環境である。信州大学は自然の仕組みを上手に活用する研究、技術の発信基地になりたい。信州大学の教員が環境問題を解決するためのオピニオンリーダーになり、今後の持続可能の社会に貢献できることを願っている。

2005年度の世話人代表は、繊維学部の中本信忠であった。各学部の世話人は、吉田隆彦（人文）、石澤孝（教育）、樋口均（経済）、藤山静雄・戸田任重（理）、酒井秋男（医、2006年度は竹岡みち子）、富所五郎（工）、星川和俊（農）、中本信忠（繊維）である。しかし、編集世話は、理学部の戸田にお世話になることが大きかった。環境科学年報は28号になるということは、30年近く、活動を続けてきたのである。継続は力なりといわれている。2006年度も、研究会を継続させたい。2006年度は、工学部社会開発工学科の梅崎健夫先生 umezaki@gipwc.shinshu-u.ac.jp が引き受けて下さることになった。ペーパーレスの流れ、電子化の動きの世の中である。年報を、電子出版にするアイデアも考えられるとのことであった。今後どのようにして継続させるか皆さんの知恵を拝借したい。

編集世話　繊維学部　中本信忠

理学部　戸田任重

２００６．２．１６．